

或は *pu-lit* と發音せられたかに外ならぬ。さて立ち戻つて祁連について考察してみると、祁連は匈奴語といふのであるから *kilien* といふ複綴語を寫したものと思はれるが、また *Kien* といふ匈奴語があつて、それを此の二字で寫したことが不律と同様であつたとも考へられる、何れの場合にしても之を *tien* 天の方音 *khien* —— 此の方音の早くから發達して居つたものであることは前に述べた——の訛つて *kilien* 又は *Kien* と音ぜられたのを寫したか、もしくは *khien* と呼んだ方音の古きものに *Kien* の形があつて、それを寫したものの一つのであると思はれる。天山は「即祁連山也、匈奴謂天爲祁連」とか、「祁連山即天山也、匈奴呼天爲祁連」と見えるのは、かくて天といふ漢語を訛つた匈奴語を、更めて漢字で寫したものと解釋したいと思ふ。元來漢語に發した外國音を漢人が聞いて、それが元來漢語であることを認め得ないで、純粹の外國語として扱つた例の少くないことは、今更めて之を擧げるまでもないことで、祁連の如きも同様の場合と考へる。

祁連についてかゝる見方をする時に、當然同様の解釋を加へねばならぬのは、匈奴の裔といふ赫連勃々の赫連である。赫連が天の義であらうと思はれるのは、晉書載記赫連勃々の傳に、「朕之皇祖自北遷幽朔、姓改妣氏、音殊中國、故從母氏爲劉氏、而從母之姓非禮也、古人氏族無常、或以因生爲氏、或以王父之名、朕將以義易之、帝王者繫天爲子、是爲徽赫實與天連、今改姓曰赫連氏、庶協皇天之意、永享無疆大慶、係天之尊、不可令支庶同之、其非正統、皆以鐵伐爲氏、庶朕宗族子孫、剛銳如鐵、皆堪伐人」とあるに據るのである。赫連は \**khaklien* であつたであらうが、當時無論存在した筈の *khak* の尾音 *k* といふ入聲音は、次に來る語と連接する場合には脱落することが多いから *khak-lien* は *khalien* に應じ得べきであるが、*khalien* では匈奴語として母韻の調和上如何と思はれるか